

滿洲に於ける滿支人勞働者

三 崎 鐵 之 助

一、苦力の意義

滿洲では滿、支人の不熟練勞働者のことを俗稱として「苦力」といひ、理論的にいひ表はす場合には「工人」と稱して居る。又苦力の別名として「華工」と謂ふ語があるがこれは「中華民國工人」の略稱であつて、この語は約十年前早川滿鐵社長當時出來たのであるが、然し滿洲國建國の今日滿洲に定着せる勞働者に對し、この名稱を用ふことは適當ではないと思はれる。

苦力といふ語は元來支那語ではなく、支那語では勞働者のことを俗語では「做工的」「力作的」と謂ひ、文學的方面では「做工者」「力作者」と謂ひ、文俗兩語では「工人」「小人」と稱して居る。然し最近の支那の専門的な著書の中にも苦力なる文字が用ひられて居ることより今日では完全な支那語になつて仕舞つて居ると見て差支へない。

この苦力なる語が如何にして滿、支人の不熟練勞働者の意に通ずる様になつたかに就て二つの説を紹介すれば次の如きである。

「支那に於てこれを勞働者と云はず、特に苦力と稱する由來がある、と云ふのは苦力と云ふのは元來支那語では

なく、英語の Coolie 或は Cooly の譯語で、この英語又元來の英語ではなく、タミール語の譯音である、抑々タミール語に於てクーリーとは雇傭の意義であつて、西洋が東漸當時西洋人はこの語を以て亞細亞人の不熟練労働者を總稱したものであつたが、十九世紀以後の歐米人の著書は何れもクーリーなる語の使用範圍を、自身旅費を負擔し又は雇主なる白人に年期を入れて、其白人の負擔を以て外國に移住する印度人及支那人の不熟練労働者並に各本國に於て居住白人に雇傭せらるゝ印度人並に支那人の不熟練労働者に限定して仕舞つた。それから十九世紀に入り彼の有名な東印度會社の對支那貿易が益々發展し廣東を貿易港として、盛んに支那商人と取引するに及び英國人の商館は激増し、之等英國の商館に使用せらるゝ支那労働者は漸次其數を増加し、之と同時に之等開港場に於ては、支那クーリーなる語は一般に使用せらるゝに至り、遂に支那人は譯音「苦力」なる文字を使用する様になつた。一方南洋其他の殖民地に於て、白人に使用せらるゝ支那労働者も増加し、茲に支那苦力なる語は海外に廣く使用せらるゝに至り、十九世紀の末葉より支那苦力なる語の使用範圍は更に擴張せられ、單に外國人に使用せらるゝ支那人不熟練労働者を指稱するに止まらず、凡ゆる支那人不熟練労働者を指稱するやうになつた。(註一)

「クーリーとは純粹の支那語ではなく、歐人東來の後、歐人によつて呼稱せられた支那人足の總稱である。夫れが何國語であるかは知らないが支那人同志には苦力なる言葉は用ひられてゐない。彼等の中に常に工人、新語では労働者と稱せられてゐる。けれども外人の東來漸く繁く支那労働者を使役すること愈々多く常に之等を指して苦力と稱呼するに及び、今や外人來往繁き地に在つては苦力なる言葉は甚しく普及し殆ど支那語と成つた觀がある。さて

「クローリー」とは「受苦累の人」の意である、力に頼つて生活する人であるけれ共元來が支那語でないから苦力の範圍限界は甚だ不明瞭である。そこで私の看る所では苦力なる語の持つ範圍は勞働者のそれより遙かに狭く、苟くも或る種の技藝を有する者は苦力の仲間に入れるのは妥當ないやうである」^(註二)

以上苦力の語源に關する二つの説を紹介したのであるが何れもこの語の使用範圍が明かでなく、それ故身に弊衣を纏つて居る支那人及滿洲人の勞働者を見れば直ちに苦力と思ふ人が多い様であるが、これは誤であつて嚴密なる意味に於ける苦力は次の四項に當嵌る勞働者を謂ふのである。

(一) 漢民族及滿洲民族であること (鮮系の滿洲人勞働者に對しては絶対に苦力と謂はぬ)

(二) 不熟練勞働者であること。

(三) 他人決定の勞働に従事する賃銀勞働者であること。

(四) 主として屋外にあつて筋肉勞働に従事する者であること。

以上に依つて大體苦力の意義を明確にし得たと思ふ。

(註一) 大正九年社會政策時報創刊號小松敏郎氏論說

(註二) 上杉益喜氏著「仲仕苦力の研究」

二、自由勞働者

自由勞働者の意義は本質的には非常に高遠であり事實問題としては複雑多岐で亘るけれども、これを一言にして

滿洲に於ける滿、支人勞働者

云へば、雇傭關係が常に變動し而も労働業態及び労働現場の一定せざる不熟練労働者といふ事に盡きて居る。この自由労働者のことを東京方面では一般に「立ちん坊」と稱し、阪神方面では一般に「鯊鰐」と稱して居る。この労働者が一旦傭はれば何々人夫と雇主が勝手な名稱をつけるのであるが滿洲人は労働市場にある自由労働者と職に就いた者との間に特殊の名稱に依つて區別を爲して居る。

滿洲人は日傭労働者のことを卯子工と云つて居る、これは労働時間の最も長い労働者といふのである。又農業労働者には雇傭期間の長短に依り長工と短工とがある、長工は定傭で長期雇傭されるものであり、短工とは其日々に雇傭關係を更改される日傭労働者のことである、この短工は長工に比し長時間の労働を課せられ又要求される。即ち日出から日没迄耕作労働をなし、漸く其日の日當にありつける工人であると云ふ所から斯くの如く名付けられたものであり、これが工業時代に入るに及んで工業及び鑛業に従事する一般労働者に對しても流用されるに至つたのである。

仲仕労働者の事を脚行と云つて居る、これは一つの組合的團體の名稱であつて一人々々を指す場合にはこれを扛脚行と云つて居る、この組合に這入らないで孤立して居る労働者を小扛と云ひ、この小扛が職を得んが爲に労働市場に居る時、滿、支人はこれを打卯子と稱し、この打卯子が仕事にありついた時に始めて卯子工と稱せられるのである、この卯子工が就勞部署を異にすることに依り土工、荷役苦力、掃除夫、葬儀人夫等に分れることになるのである。

尙、捺件子といふがある、これは營口、哈爾賓或は上海方面に多く、或る地點から他の地點迄貨物を運搬した場合一件につき幾何として賃銀の支給を受ける労働者のことである。これ等自由労働者の日收額は幾何かといふに勿論季節、需給關係、労働能率、體質の如何等に依り多少の差異はあるが普通日本貨幣の四拾錢位である。

三、苦力の分類及び組織

苦力の分類を行へば(一)雇傭關係より見た區別(二)雇傭期間より見た區別(三)業態より見た區別の三種となる。

(一)雇傭關係より見た區別といふのは(A)雇傭關係が直接であるか(B)間接であるかに分けることが出来る。

(A)雇傭關係が直接のもの

(イ)一定の雇傭條件といふものなく雇主と直接雇傭契約を結ぶ定傭労働者をいふ。採炭苦力等はこれである。

(ロ)一定した雇傭條件といふものがないが、雇主と労働者との間に何等介在者なく直接雇傭されるが雇傭期間が極めて短期間である、其故氏名登録のないもの。

(B)雇傭關係が間接のもの

(イ)勞力供給請負契約に依る供給労働者であつて官廳、會社の直營土木建築工事に使役される労働者に多い。

(四)作業若くは工事の請負に従事する労働者であつて、鐵道の貨物積卸の請負或ひは土木建築の請負工事に従事する労働者をいふ。

この間接雇傭といふのは中間介在者の存するが故に賃銀の支拂も亦間接となる、即ち賃銀に支拂と受取の兩面が

あり、供給人夫等はこの部類に屬する。

(二) 雇傭期間から見た區別といふのは雇傭期間が極めて(A)短期間であるものと(B)長期に亘るものとの區別がある。

(A) 雇傭期間の短期間のもの

短工、臨時夫、日傭工等で所謂卯子工である。

(B) 雇傭期間の長期に亘るもの

年工、月工、常傭方、定傭夫等であつてこの常傭の中にも更に三ヶ月六ヶ月とか云ふ期限付の者もある。

(三) 業態から見た區別としては一般的には農業勞働者、漁業者、工業勞働者、交通運輸業勞働者等幾多の區別があるが滿洲人の下級勞働者は大體左記の如く六種に分けることが出来る、即ち(A)土木建築苦力(B)採炭苦力(C)採鑛苦力(D)荷役苦力(E)農林業苦力(F)雜役苦力である。

(A) 土木建築苦力

この種の苦力中最も數の多いのは土工及び人夫であつて、土砂の切取、運搬、大工、左官の手傳等の雜役に従事する。滿洲では冬期中工事を中止するから之等の苦力は大部分業態の異なる他方面に移動するか歸郷する。

(B) 採炭苦力

採炭苦力の最も多く従事して居る所は撫順炭坑である。同炭坑には約三萬人の苦力が從來して居る坑内採炭、

露天採炭、坑内坑外の雜業に従事して居る。其他本溪湖炭坑には約六千の苦力が従業して居る。

(C) 採鑛苦力

採鑛苦力とは鞍山鐵山等に於て原鑛の採掘に従事して居る鑛夫を云ふのである。

(D) 荷役苦力

荷役苦力とは荷役作業に従事する勞働者のことを云ひ、支那人はこれを脚行と云つて居る。我國で謂ふ所の仲仕と同様である。大連埠頭では荷役苦力を左の如く分類して居る。

(イ) 本船苦力

船舶よりの陸揚又は船積作業に従事する苦力を云ふ、船内人夫、デツキマン、ウインチマン、運搬苦力等に區別される。

(ロ) 石炭苦力

石炭の貨車積卸、船舶への積込等石炭に關する凡ての作業に従事する苦力を謂ふ。

(ハ) 陸上苦力

我國で謂ふ所の陸仲仕と同様である。發送苦力、到着苦力、繰替苦力、看貫苦力、檢斤苦力、常傭苦力、馬車苦力、材木苦力等に區別される。

(E) 農林業苦力

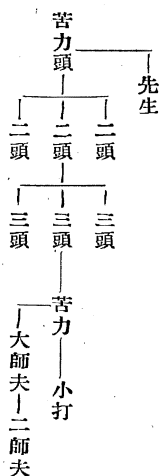
滿洲に於ける滿、支人勞働者

苦力中最も數の多いのは農林業苦力であるが産業別従業人口統計の明かでない今日では其の數を明示することが出来ない。

(F) 雜役苦力

雜役苦力中最も多いのは官廳、會社、工場等の一般雜役に従事する苦力である。これには定備のものとは日傭のものがある、この外日傭労働者はその雇主により任意に葬儀人夫、掃除人夫等の名稱を附せられる。

以上(A)乃至(F)に屬する苦力は一般に苦力頭に依つて統轄されて居る。苦力頭とは長夫目、把頭、或ひは工頭とも稱し、我國に於ける親方の如きものである。曾ては大苦力頭制度行はれ大苦力頭は純然たる企業家的立場に在つたが其の弊害少なからざる爲現在ではこの制度は漸次影を沒し、これに代つて中苦力頭制度が現はれるに至つた。其の組織を圖解すれば次の如し。



これは約二百名の苦力が一團をなして居る場合の組織であつて、三頭は十五、六名の苦力を一班とする班長であつて、三頭は部下の苦力と同様に作業に従事し、二頭は數名の三頭を部下に持ち作業の指揮と統制の任にあたる、

苦力頭は直接作業に従事することなく部下苦力に對する管理と事業主との間に於ける折衝の任にあたるものである。

苦力頭の任務としては部下苦力に對し作業上必要な知識を與へ、自ら指揮の任に當り作業上の諸注意、技術等の教示をなす、又彼等の私生活上の一切の世話をもしてやる、つまり勞働管理の實權を掌握して居る理である、苦力は事業主に對して懐ける誠忠心なるものは甚だ貧弱であるが就業當初より一切の世話を受けた之等苦力頭に對しては非常に尊敬心強く所謂親分兒分の關係によつて繋れ、その命令は良く徹底するので作業上に於ける指導、鞭撻は之等苦力頭によつて行はしむれば人情、風俗の異なる日本人によるよりもより効果的であると云はれて居る、又苦力頭は部下苦力に對する任免權とも稱すべきものを持ち、且つ地方的に一つの顔役をなし社會的地位を占めて居る。

尙先生、大師夫等も苦力の團體編 上大きな分子をなして居る。先生といふのは要するに書記であつて苦力頭に直屬して居り賃銀の計算金錢の出納其他一切の記録事務を擔當し苦力頭より月給を貰ひ受け共同生活を營み食費は自己が負擔して居る者が多い。大師夫は大師傳大什夫とも云ひ炊事夫の事であるが炊事を専門に行ふばかりでなく苦力の出働中其の留守番をもし食事材料の購入其他宿舍の内部的な仕事一切を行ふ。尙又、苦力頭が頭列の外に多少でも苦力の稼高より胡魔化して自分の収入を増加させるのは主に炊事其他の共同買物の價格に關してあるが其の相棒は大師夫である、其故大師夫は苦力頭の絶大なる信任者である。

この外に二師夫小打が居る。二師夫は大師夫の下働きであり、給料は多く苦力頭が負擔し食事は各苦力が共同し

て負擔するのが普通であり、小打とは宿舍内の雑用食事の運搬等をする所謂小使で食事だけ無料で食はせて貰ひ小使錢は各苦力から適宜に貰ひ受ける。

尙又、斯様な大集團には苦力相互の共同經費で理髮師を雇入れて居る所なども有る。

四、賃銀の分配

事業主の支拂つた勞銀が個々の苦力の手に入らる迄に如何なる徑路をたどるかを見るに單獨労働者と集團労働者との間に多少の相違あるをまぬがれぬが大體次の三種に分つことが出来る。

(一)事業主と苦力との間に介在者がある場合、例へば或る事業に對し總括請負を爲すと云ふが如き場合には請負賃銀は事業主より直接請負人に渡され、請負人は苦力頭に、苦力頭は二頭に、最後に個々の苦力の手へ賃銀が渡るといふことになる。其故其間に搾取が行はれ、前貸金の元利、食費代、強制貯金、作業用具費等を差引かれて行くから個々の苦力の手に渡る賃銀は非常に微々たるものである。

(二)供給力苦の賃銀は事業主より苦力供給請負人に支拂はれ、更に苦力頭の手を経て苦力に渡される。

(三)工場炭坑等の直割苦力は會社の會計課に於て總工賃に對する或一定率を苦力頭に對する別途支給金として控除し、更に物品購入費、食費等を其の賃銀中より控除し殘額を個々の苦力に直接支給する。これは苦力頭の收益も一定され搾取の行はれる餘地がない。

以上の如く事業主より勞賃が苦力の手に渡るまでには中間搾取、頭刎の行はれる場合が多い、其の原因は種々あ

と思ふが次の如きが主なる原因であると思ふ、即ち苦力は全然貯蓄を有せず又同時に信用をも有しない、加ふるに日用品の購入は現金であるのは勿論宿泊料、家賃の支拂は多く日拂である、其故に其日の賃銀は必ず其日に受取らねばならぬ、しかるに官廳、會社等の一般事業主の賃銀支拂は半月拂、十日拂であつて到底彼等の要求を満足せしめ得ない、従つて事業主と苦力との間に立ち賃銀の立替を爲し兩者の要求を満足せしむる仲介者が必要となるのである。この仲介者が所謂苦力供給請負業者であつて賃銀頭制制度發生の大なる原因を爲すものである。左に一例を圖解して頭制の状態を示して知る。



次に我國に於ける勞銀頭制の状態を中央職業紹介事務局調査資料により參考迄に引用して見る。

「人夫供給請負業者と稱するは所謂人夫供給ブローカーと稱せらるゝものにして營利職業紹介業者の専門化したるものと認むべく元部屋孫部屋等と其の性質を大に異にするものなり、彼等は概ね勞動下宿の設備を有し一般に何々組、何々商會、何々會と稱し常に營利紹介業者を利用し、或は飯屋、電柱、共同便所等に官公署人夫雜役大募集の貼紙を爲し、公益職業紹介所に對しては個人名義を以て此等の求人申込を爲す等不斷の努力を費すものにして此等の宣傳、又は募集に應じて訪れたる求職者よりは一圓乃至二圓の入會金を徴し、其の貸與する勞働用具の保證として三圓乃至五圓を預り、住込の者よりは寢具代並部屋代として一日二十五錢を徴し食事付の場合は八十錢を徴す

るを普通とす、常に五名以上八十名内外の止宿者を有し賃銀の精算は月一回乃至三回を普通とし決して日拂を爲さず、且つ五日乃至十日分前後の収入を貯蓄の形式にて差引き保留し以て其の足留策としつゝあり、需要、先は官公署、會社、工場等の臨時雜役、手傳を主とし一般家庭の大掃除、科轉等より建築工事に於ける大工、左官等の手傳に至る迄を含む、一般に立關構へ厳しく電話を備へ勞働者よりは大將と呼ばれて長火鉢の彼方に襦袍を着し、大巾の座布團の上に親分然と納まる、勞銀は總て親方直接集金し其の頭別は概ね一割乃至五割にして賃銀の高きに從つて高率となるものゝ如し、例へば一圓五十錢の場合は二十錢以上七十錢を刎ね三圓の時は五十錢以上一圓五十錢を刎ねるものにして、彼等同業者間に需給調節の爲、相互に連絡あり、供給に不足を生じたる場合は其の需要國一人に付普通十錢乃至三十錢の頭を刎ねて他の同業者に廻付す、之を引受けんとする同業者之を充足する能はざる時は更に他の同業者に前同様の頭別を爲したる上、之を引斷ぐ、斯の如き連絡を繰返へし其の出面（賃銀）を數次に亘りて殆んど賃銀の體裁を爲さざる迄に削られ、仕事口もアブレとなるよりは一食なりとも有り付くに然すと考へたる勞働者に依つて充され、其の者は僅かなる賃銀の爲に一人前の勞務を課せしめられるものなり、又他面需要不足の場合は例令住込の勞働者と雖も前記の如く數次に亘りて削り細りたる勞銀に甘んずるか徒食するの外途なき彼等に對し親方は何等の義務を負はざるものなり」

以上に依つて人夫供給請負業の内部的事情につき記したのであるが、これらの人夫が作業現場に於ては如何に監督されるか監督の段階が何うなつて居るか一例を圖解すれば

元締 — ↓ 親方 — ↓ 棒頭 — ↓ 小廻 — ↓ 土工

といふ様になつて居て其の間種々の形に於て搾取が行はれて行くため支拂賃銀と受取との差、即ち頭刻の程度はかなりの額となり判然と見極めること不可能といはれて居る。

以上の如く勞銀の中間搾取は現代社會に於て公然と而も正業として行はれて居る時、そして斯くの如く其日の糧にも窮して居る多くの勞働者のあることを知る時、この中間搾取の不合理を叫ばぬ者が有るだらうか。

然し斯くの如き中間搾取も無智なる苦力は、それが極めて當然な事としか考へて居らず、彼等の幸福を増進せんとして苦力頭の手を経ず直接事業主より個々の苦力に支拂を爲すが如き新制度を實行するに當つては反つて疑問視せられ、これを理解せしむる迄には尠なからぬ苦心を要するものである。

五、勞働條件

最後に一般滿、支人勞働者の待遇條件に就き述べ如何に彼等が植民地利潤の一重要源泉を爲して居るかを見たいと思ふ。

賃銀は次の表の如く滿、支人勞働者は日本人勞働者に比較して非常に安い。

職工名	日本人		滿、支人	
	賃	銀	賃	銀
製罐工	三・〇〇		〇・九八	
仕上工	二・九五		〇・九一	
			三三	
			三三	

日本人職工一〇〇に對する滿、支人の比

滿洲に於ける滿、支人勞働者

銅工	三・〇八	〇・九一	二九
旋盤工	二・九六	〇・八九	三〇
鍛冶工	三・一〇	〇・九〇	二九
鑄物工	二・六三	〇・九三	三五
電氣工	二・〇二	〇・九四	三一
木工	三・五〇	一・〇一	二九
模型工	二・七九	〇・九四	二四
平均	三・〇〇	〇・九二	三一

(備考) 昭和七年三分末現在に於ける大連某機械製作工場に於ける日滿人職工賃銀表に依る。

即ち日本人勞働者の賃銀一〇〇に對し、滿、支人のそれは三一に過ぎない。而もその勞働能力たるや賃銀の差に比較してそれ程著しくはないのである。餘剩利潤の一部は明らかに日本人の勞働者を潤ほしてゐるのである。

又、婦人勞働者の一日賃銀を見るに

	最高	最低	平均
燐寸業	一五錢	六錢	一〇錢
生糸業	八	五	六

綿米業 二三 一八 二二
 精穀業 一六 一一 一四
 煙草業 四五 一七 二一
 即ち數字の示す如く、驚くべき低廉なる賃銀である。

次に滿鐵沙河鐵道工場に於ける日滿兩工の能力の比較を見るに

職場名	技術能力		出動能力		總合能力	
	日	支	日	支	日	支
組立仕上職場	一四五	一〇〇	九一・一	八五・四	一五五	一〇〇
製罐鉸鉄職場	一一三	一〇〇	九〇・六	八七・一	一一七	一〇〇
旋盤工具職場	一一五	一〇〇	九三・七	八七・八	一二三	一〇〇
電氣動力職場	一二〇	一〇〇	九六・四	九二・八	一二五	一〇〇
鍛冶職場	一一九	一〇〇	九五・三	八九・六	一二六	一〇〇
鑄物職場	一二〇	一〇〇	九三・七	八三・七	一三四	一〇〇
客車塗裁縫職場	一一八	一〇〇	九二・七	七八・二	一三九	一〇〇
貨車製材職場	一一〇	一〇〇	九二・二	九〇・一	一一三	一〇〇

滿洲に於ける滿、支人勞働者

車 臺 職 場	平 均	一 二 〇	一 〇 〇	九 三・一	八 四・五	一 三 三	一 〇 〇
		一 二 〇	一 〇 〇	—	—	一 二 九	一 〇 〇

(備考)昭和四年十一月滿洲臨經調査に依る。

即ち熟練を要する仕事、知識的な仕事に於ては、滿、支人勞働者の勞働能力は日本人勞働者に比し劣るが、製罐、鉸鋸、貨車製材の如き熟練を要しない勞働に於ては日本人勞働者の勞働能力と殆どちがはない。勞銀と比較して見ると同年度の沙河口工場の日本人勞働者の一人一日平均賃銀は三圓八十九錢で、滿、支人勞働者は八十六錢である。勞働能力の差に比し勞賃の差は餘りにも甚だしい。

勞働時間は一般に長く昭和六年六月の關東廳の調査に依れば、最長十八時間、最短六時間三十分、平均十時間三十八分である。

勞働者の年齢を見るに

年 齡 別	人 員	百 分 率
十三歳—二十歳	八八六	五・七
二十一歳—二十五歳	三・〇七一	一九・七
二十六歳—三十歳	四・一八五	二六・八
三十一歳—三十五歳	三・三三二	二一・三

三十六歳—四十歳	二・八二九	一八・二
四十一歳—四十五歳	九九五	六・四
四十六歳—五十歳	二六二	一・六
五十一歳以上	四七	〇・三
計	一五・六〇七	一〇〇・〇

(備考)昭和八年十二月末現在、撫順炭坑調査に依る。

二十歳以下の未成年者が五、七を占むるは如何に滿洲に於ける労働が植民地的であるかを示す好き證據である。昭和七年十一月の滿鐵勞務時報は九歳以下の子供が労働に従事して居ることを記してゐるが、これ等は全く驚嘆の外ないのである。

以上の如く滿洲に於ける滿支人の労働條件は明かに植民地的である。然らば何故に彼等は植民地的労働條件、具體的には低勞賃、必要労働日に對しあまりにも大なる労働日の下に存在せなければならないか？

勞賃は労働力の再生産に必要な生活資料に依つて決定せられるから、資本主義的生産方法が發達せず、自然的歴史的に發達した第一次生活必需品の價格及び範圍、労働者の教育等が一般に小である植民地に於ける勞賃は、抽象的一般的に小ならざるを得ないのである。支那に於ては商人が直接に生産を制握し「生産方法を革命することなくして、直接生産に従事せる人々の位置を悪化するに過ぎず、彼等をば直接資本の下に包攝されてゐる人々よりも更

に不良な諸條件の下に立つところの單なる賃銀勞働者及びプロレタリアに轉化し、舊來の生産方法の基礎に立つて彼等の餘剩勞働を占有する」が如き狀態であつたのである。又部分的ではあるが奴隸勞働も殘存して居たのである。尙マニユファクチュアールの生産様式は近傍の季節農民の低賃銀による雇傭をも可能ならしめた。斯様な待遇條件を農奴的生産關係から抽された支那人勞働者は、その生育せる環境の故によく忍び得た。斯くの如き狀態を利用する權能を外國資本は與へられたのである。而も彼はその企求する高率利潤獲得のために經濟外の強力を用ふる。農奴制的殘虐の上に文明が追加されるのである。

(註)資本論第三卷上二九三頁、改造社版

以上の各節に於て滿、支人勞働者に就て概説して來た。これに依つて如何に彼等が勞働條件の絶對的上昇にも不拘、眞にそれが微々たるものであり、依然人類の最低生活保證に出でぬものである事を認識すると共に相對的に問題を觀察する必要、即ち餘剩價值率の問題を検討する必要に就て諸子の研究を促し度いと思ふ。